

特集

# フィールドワーク世界経済

多民族国家カナダの苦悩と希望……室田武  
 市場経済への転換過程にあるハンガリー……盛田常夫  
 東南アジア農業研究とフィールドワーク……藤本彰三  
 歴史的变化のただ中に立つアフリカ……田中二郎  
 モスクワからロシア経済をみる……大橋隆  
 「途上国」から抜け出せないラテンアメリカ……細野昭雄  
 私の体験的「国際社会を見る目」……小川秀樹

# 経済 社 セミナー

日本評論社

1954年11月1日発行(毎月1回1日発行)通巻478号  
 昭和32年4月18日第3種郵便物認可 ISBN0386-922X

November 1994 no.478

# 11



# 市場経済への 転換過程にある ハンガリー

盛田常夫  
Morita Tsuneo

## 東欧との出会い

人のめぐり合わせというのは不思議なもので、理屈で説明できない偶然が人の運命を決めてしまします。私が大学へ入学した1960年代半ば、中国では毛沢東の文化大革命が始まり、日中関係、米中関係がたいへん緊張している時期でした。ですから、受験勉強から解放されたら、ぜひ、中国を中心とした国際関係の勉強をしようと意気込んで大学へ入学したものです。アメリカの自由にも淡い憧れを抱いていましたから、日本、中国、アメリカをめぐる3国関係の研究は、非常にタイムリーなテーマのようにみえました。

ところが、大学へ入った途端に、英語やアメリカへの興味が日増しに失せてしまいました。キャンパスの雰囲気がそうさせたのかもしれませんが、思想形成の面白さに比べ、アメリカ文化の軽さがたまらなく嫌になったように思いま

す。それでも、多分、現在のように簡単に海外旅行ができる時代なら、自分の足で出かけ、実際の社会を体験することもでき、外から見て感じたものとは違う印象を得ることもできたでしょうが、60年代後半の日米の所得水準格差は大きく、とても個人旅行などを考える時代ではありませんでした。

一つの転機は大学3年の夏、そう1968年にやってきました。ブルガリアのソフィアへ出かける大きな代表団の通訳の仕事にありつくことができたのです。当時、日本の為替管理は厳しく、外貨持ち出し額が150ドル前後の時代です。貧乏学生にとって、ただで海外渡航できることはたいへんラッキーでした。大黒屋光太夫には及びませんが、新潟からナホトカまで船で渡り、そこから列車で十数時間走ってハバロフスクへ、さらにソ連製のジェット機イリュージンでモスクワを経由し、夢心地でソフィアに着いたのを覚えています。

ソフィア大学での昼食は楽しみの一つでした。農産物の豊富なブルガリアならではの食事は、豊かさを感じたものです。17年後の1985年に再びソフィアを訪れる機会がありましたが、街並みがちっとも変わっていないのに驚き、歳月が流れた分だけ、寂れたという印象を拭き切れませんでした。オペラ歌手の成田絵智子さんのレッスンなどに同行して過ごしたひと昔前のソフィアの夏を懐しく想ったものです。

2週間の行事が終わり、今度は帰路の大旅行が始まりました。まず列車でルーマニア国境まで行き、そこで貸切バスに乗り換え、ブカレストに向かいました。当時、ルーマニアはチャウシェスクが共産党書記長に就任して間もない時期で、対ソ連自主独立を掲げ、西側からは社会主義のヌーベルバーグの寵児のように囃し立てられていました。その後の独裁の暗いイメージとは違い、当時のルーマニア社会はとても初々しい明るさに満ちていたように思います。ブカレストから北の観光地ブラショウまで楽しいバス旅行が続き、ルーマニア側の通訳を担当してくれた素敵な女性たちともソ連国境、現在のモ

ルドヴァ共和国との国境で別れ、再び列車の旅となりました。

列車はキエフを素通りし、ウクライナの工業都市ハリコフへ向かいました。ハリコフで2泊し、向日葵畑ひまわりが限りなく続く農場を訪問したのを覚えています。農家ででの歓待も忘れることはできません。

ハリコフからモスクワ、さらにレニングラード（ペテルスブルグ）へとノンストップで列車の旅が続き、そこで数日過ごしました。大黒屋光太夫がエカテリーナ2世に謁見がなかったかの夏の離宮も訪れました。この後は、一途日本へ、新築まもないクレムリン傍のロシアホテルに1泊し、再びハバロフスク、ナホトカを経由して帰路に着いたのです。

1968年8月23日、ワルシャワ条約軍のプラハ侵攻のニュースを新潟沖に停泊中の船の中で知り、他人事でない胸騒ぎを覚えたのを記憶しています。時まさに日本でも学生運動が活発化し、アメリカのベトナム戦争への介入が激しくなり、世の中が再び騒がしくなり始めた時期です。この10年後に再び東欧を訪れるなど、夢にも考えないことでした。

## なぜにハンガリー

1978年も暮れ、ローカル空港のようなブダペストの国際空港に降り立ちました。不勉強もいところで、ハンガリー（マジャール）語はもちろん、ハンガリーの歴史も勉強しないで、着の身着のままブダペストにやってきたのです。東欧史をやっていたわけでも、社会主義経済をやっていたわけでもありませんから、ハンガリーへ来る必然性はまったくなかったのです。たまたま、倉林義正先生の「ハンガリーは面白いよ」という一言で、文部省交換給費生の奨学金を得たのです。何を隠そう、教鞭を取った法政大学の市ヶ谷キャンパスが時代遅れの「中核一革マル戦争」の真っ最中で、教授会メンバーとしての最初の仕事が「内ゲバ」予防の検問・門番だったのにいたく失望し、キャンパスから脱

出を図ったというのが真相です。非常に不謹慎なハンガリー留学の動機でした。

ブダペストに来てわかったのですが、国費給費生の場合にはハンガリー語の研修が義務づけられているのです。否応なくハンガリー語の個人教師が付き、2カ月ほどレッスンを受けることになりました。せっかくハンガリーにまで来たのだから、語学ぐらいは勉強しても損はないだろうと思い直し、文法が一通り理解できた段階で、専門の小冊子の翻訳をやり始めました。ハンガリーには国民経済計算の分野で優れた研究者・実務家があり、国際所得国富学会の会長を努めたドレックスラー、彼の死去の後そのポストを受け継いだアルヴァイや、中央統計局の国民経済計算課長のホルヴァート女史（現、国立銀行統計局長）などとも、個人的な付き合いが始まりました。

正式な所属先はカール・マルクス経済大学（現、ブダペスト経済大学）の国民経済計画学科（現、数理経済学科）で、ここは旧体制の経済エリートを輩出するところでした。旧体制最後の首相ネーメット（現、EBRD 副総裁）、その当時の計画庁長官ケメネシュ（現、デロイト・トウツェ・ハンガリー社長）、副首相メジェッシなどはみなこの学科の卒業生ですが、現学科長で一般均衡の計量モデルを研究しているザライだけは、自他ともに認める能力がありながら、政治から身を遠ざけていました。年の順から、ケメネシュ、ザライ、ネーメットがこの学科の秀才三羽鳥で、最近になって、学問からいちばん離れてしまったケメネシュがハンガリー経済学会会長に就任したのには驚きました。ともかく、これらの人物の中に身をおくことができたことで、その後の関係が築かれました。

日本でも外国でも、人的関係がもっとも大切な財産です。とくに、旧社会主義体制下では政府の機関でも大学でも、個人的なコネクションなしで重要な資料や情報を得ることは不可能でした。社会主義体制に限らず、何をやるにしてもライト・パーソンに当たり、ライト・コネクションを得ることが、いちばん大切なのです。

これにしくじると、とんでもない回り道をしなければなりません。

偶然にきたハンガリーが経済改革の先進国であったこと、優れた友人や研究者にめぐり会えたこと、そして経済学者の水準が高いことがわかったことで、新たな研究対象が開けてきました。コルナイの『不足の経済学』が出版されたのは、留学も終わりに近づいた1980年春でした。この時期、大学と中央統計局を往復していた私は、経済改革書の日本語翻訳の仕事に埋没し、コルナイのいるアカデミー経済研究所を訪ねる機会を失いました。大学の友人を介して、彼と初めて会ったのは1982年春のことです。翻訳書の出版の後、再びハンガリーを訪れ、日本招聘を打診にコルナイを研究所に訪ねたのが最初です。

コルナイの招聘は私が所属していた法政大学社会学部の創設35周年記念行事として1983年1月に実現し、以後の数年はコルナイ理論の紹介に没頭することになりました。社会主義経済理論のパラダイムの転換を示したコルナイの着想はたいへん新鮮なもので、日本の社会主義経済学界にも大きなカルチャーショックを与えました。

高い志あってハンガリーを選んだわけではありませんが、研究対象がメインストリームを外れなかったことで、事後的にハンガリーの選択が誤りでなかったことが証明されました。偶然が重なることなしに、このようにはいかなかったでしょう。ライト・パーソン、ライト・コネクションの大切さは強調して余りありませんが、多くの人とのコミュニケーションを大切にすることが前提です。外国語の勉強もその要件の一つで、コミュニケーション手段が険しい道を拓いてくれるのです。それは言葉だけに限りません。今でも、一緒にサッカーをしたり、テニスをした仲間とは、長い付き合いが続いています。

## 東西のクロスロード

1968年の旅行から20年、1978年の留学から10年、1988年に再びブダペストへ赴任することになりました。ちょうど外務省が初めてハンガリーへ専門調査員を派遣することになり、その仕事を得ることができたのです。ハンガリーの経済改革が動きだした前兆があり、それが政治的な改革をひき起こす可能性を秘めていましたが、ちょうどこの時期に外務省の予算がとれたのはまったくの偶然としかいえません。

赴任当初より共産党内部の改革が始まっており、1989年春にはオーストリア国境の鉄条網を切断するという試みがおこなわれました。当時、私はこの切断がきわめて象徴的なものであっても、チェコ=スロバキアと東独からハンガリーを経由する亡命希望者が増えることになろうという電文を、本省に送りました。事実、このニュースを聞きつけた東独の人々が続々とブダペストに滞留しはじめ、1989年夏のブダペストは東独の難民キャンプで溢れかえっていました。この難民の流出が「ベルリンの壁」を突き崩すことになったのです。

1989年12月、ルーマニアの国境の町ティミショアラにおける騒乱の原因は、ハンガリー人牧師トゥーキシシュの拘束をめぐる住民の抗議行動でした。それが首都のクーデターをひき起こし、あっという間の大統領処刑でチャウシェスク独裁の幕が閉じられたわけです。当時、ティミショアラへの視察を計画したのですが、ハンガリーからの車がチャウシェスクに忠誠を誓う秘密警察の標的になるというので諦めたものです。

ハンガリーは旧体制の時代より、社会主義国のなかでもっともオープンな国でした。もちろん、それは功罪相半ばで、中東から西側世界へ通じる回廊として、連合赤軍や国際テロリスト・カルロスなどの休養の地になっていましたし、大韓航空機爆破の金賢姫もブダペストを経由しています。最近、カルロスとハンガリーの謀報機関員が接触している現場のビデオが放映

されました。ハンガリーで事を起こさないという条件で、滞在を認めていたようです。もっとも、ルーマニアの諜報機関が反政府運動家の暗殺をブダペストで依頼したこともあるというコメントが付いていました。

映画製作に凝った金正日が韓国の映画監督と女優を誘拐し、住まいを与えたのもブダペストです。ドナウ河沿いにあるハイアット・ホテル最上階のアパートメントが彼らの住居でした。映画製作の費用を含め、不自由なしの贅沢三昧の生活が保証されていたのです。馬千頭を使うジンギス汗の映画製作を準備している時に、今度は韓国の KGB に旅行先のウィーンから連れ戻されたのが真相です。まさに、事実は奇なりといえましょう。

「ゴゴ13」の世界を地で行くブダペストはサスペンスやミステリーの題材に事欠きません。「東欧革命」以後には中国人の流入ラッシュを迎えました。かの「蛇頭」の組織がブダペストにあるといわれています。一時、中国人の人口が2万人に膨れ上がり、そのおかげで中華料理店が一挙に数十軒増えたのはいいのですが、ピザの更新でも運転免許の書き換えでも、中国人の長蛇の列に巻き込まれることになってしまいました。その後、ピザ更新の条件が厳しくなり、現在は5000人まで減りましたが、その煽りを受けて、国境でのピザの発給が廃止され、EU 諸国以外は事前のピザ取得が義務づけられるようになったのです。ここを追われた中国人は、チェコに流れているようです。

旧体制の時代から、西側へ簡単に旅行できないソ連の学者や一般の市民には、ブダペストへの旅行は商品の豊かさやサービスの良さで、人

気がありました。国境が開かれた今は、ロシア、ウクライナのマフィアが商売をしながら、休息する場になりました。西側の街よりも生活費が安く、外貨預金が自由で、必要な物が大抵は手に入るからです。高級ホテルの温泉プールはロシア語が氾濫している有り様です。つい最近も、ブダペスト郊外で、ウクライナの売春組織同士の銃撃戦があったばかりです。車を使った白昼の銃撃戦など、この国では以前には考えられなかったことです。

この夏に起きた国会議事堂とマーチュアシュ教会の連続爆破事件には、旧ユーゴスラビアのセルビア人勢力が背景にあるといわれています。ここ数年、ドイツに出稼ぎに出ている50万人を超えるトルコ人の夏の帰省ラッシュは、クロアチアやボスニア-ヘルツェゴビナを避けて、ハンガリーを経由しています。国連制裁によって国際線の乗り入れが禁止されているセルビアには、ブダペストの国際空港を利用するのがいちばん便利なのです。漁夫の利を得ているハンガリーへの嫌がらせでしょうか。

マクドナルドの東欧一号店ができたのもブダペストです。現在ではあらゆるファーストフード店が店を連ねていますが、近隣諸国のマクドナルド店でハンガリー産の牛肉とパンが使われていることはあまり知られていません。

市場経済への転換過程にあるハンガリーには、経済の生きた学習材料がいたるところにころがっているだけでなく、市場経済化に付随する社会現象にも事欠きません。ハンガリーは今が面白いといえるでしょう。

(もりた・つねお／野村総合研究所研究顧問・ブダペスト経済大学客員教授)